

いま伝えたい

——被爆者から

2015年・被爆70年
NPT再検討会議へ

父が縫った顔のけが

国鉄の職員をしていた父と母、妹と弟の5人家族でしたが、赤ちゃんだった弟は1945年の春先に、はしかにかかったのをきっかけに肺炎で亡くなりました。私は7歳でした。

自宅は、爆心地から2・5キロの広島市西蟹屋町にありましたが、空襲を避けて母と私、妹の3人は狭路という所に住んでいました。夏休みに入り、父のいる西蟹屋の家に戻っていました。

あの日、朝食後、内庭で妹と2人で遊んでいたとき、光を感じて振り向いたまでは覚えていますが、そばにあったガラス戸が爆風で飛び散り、私の左頬に突き刺さり、手で触

〈10〉 言うべきではないと思ってきたけれど…

愛媛・松山市 田中英子さん(77)

れてみると頬から口の中に手が入るほどでした。しかし、痛みは覚えていません。着ていた白い服は血で真っ赤になっていました。隣にいた妹と家にいた母にけがはありませんでした。

出産前の叔母も一緒に4人で避難することになりましたが、途中の道は、傷ややけどをした人たちでいっぱいでした。けがをしていた私は遅れがちになり、見かねた若い軍人さんがおぶってくれ、大内越峠まで運んでくれました。峠には300人を超える人たちが避難していたようです。

父と合流できたのは暗くなる前でした。応急処置法の講習を受けていた父が、私の顔のけがを縫

合してくれました。その時の痛みも覚えていません。翌日、母は私をおぶってくれた軍人さんにお礼を言わなくてはと捜したそうですが、その人は夜のうちに亡くなっていたそうです。建物疎開の手伝いに行く隣のお兄さんを「いつてらっしゃい」と送り出しましたが、そのまま帰ってこなかったのも忘れられません。

その後、私の顔の傷の抜糸のため病院にいきましたが、「これは素人が縫ったんだね、視神経を無視した縫い方だ」と。そのため、私の左目はずっと弱視のままでした。

憲法改正は戦争へ

私が被爆手帳を取得したのは、結婚して松山に

きた1970年でした。私の手帳を見た人から「医療費がタダでいいね」と言われたこともあり、被爆したことを不意に言わなくなりました。私はずっと健康でしたがし、何倍もの重い戦争被害を受けられた方のごことを知っていましたので、言うべきではないとずっと思っていました。

壮年期を過ぎ、強度の接触アレルギー、高血圧と狭心症などさまざまな病気に襲われています。全部が原爆のせいではないと思いますが、幾分かは関係があると思います。実際に戦争を体験した人も被爆者も亡くなり減ってきているなかで、私も語り伝えていくべきだと思いました。核や戦争の怖さを、命の尊さを子どもたち、次世代に伝えるのは私たちの責任です。

今の安倍政権は怖い。今の憲法はいいなと思います。「改正」するなんて言うのは戦争につながることで。いったん走り出したら止まらない、ここのやめるということはできないのです。一歩間違えたら核戦争になる危険性を感じます。私には孫もいますが、若いお母さんたちには、子どもたちにはのちを大切になさいと伝えてほしいと思います。



被爆体験を聞く会で田中さん(中央)を囲んで(昨年11月15日)